

の御はんを御右の方にくり寄て女中に給る、天盃をしきるのうへにならべ置て、酌にて御とほ  
しあり、勲勾當ないしまで天盃給り、第二の典侍は、第一の典侍の盃をこひとりても参る、第三  
のないしは第二の典侍の盃をこひとりてまるる、かくの如く玄だいにくりてゆく、勲當のない  
しは又人につたへす、男の御とほしのときもて出べきため也、上膳ぶんの人の盃つきぬれば、又  
第二のないしの盃をこひてもて出て、人數によりかくの如く、三反も四反もくりゆくなり、ひら  
御しもはれんだいにいらざるがゆゑに、廟の南のひがしの一間の玄やうじに出、南のすのこを  
へて、れんだいの南の東の一間のひがしの玄やうじより入て給はる也、次に勲當ないし左手に盃男の御  
也の料をもち、右の手にさきとりをとりて、母屋の南の間をへて御前にす、み盃を置、燭のさきを  
とり、れん臺の中央の間のひがしの玄やうじを明てしりぞく、男の次第にてとほしあり、天酌に  
てたぶ、獻人々しりぞくついでに、小さかづきのもとに寄、小さかづきを給る、第一の公卿強供御  
をとりて、玄りぞく、最末の人盃をとりて、玄やうじとして玄りぞく、手長のないし座を起て次に  
す、むはいせんの人御前を撤す、後にまるりたるを玄だいくさきに撤す、毎度毎度かくのご  
とし、事をはりて入御、女中起座、女中便宜の所にて小さかづき強供御を給る、次に御かれひとて、  
二のうねめでうしにさかづきを居て、土器物二種とり添てもて出て、申の口にて伊興にのみし  
む、さかなも同人役す、伊興さかづきを二のうねめに傳ふ、酌もさかなも伊興つとむ、夫よりつぎ  
つぎの采女しゆにいたりて、同人酌にてとほしあり、肴は或は二の采女務なり、おのくたんざ  
しきにてのむ略 中

二日、あしたのもの昨日に同じ略 中 夕方の御祝きのふにかはらず略 中 女  
中こよひ紅梅にかぎらず、おもひくの衣裳也略 中

三日、あしたの物うけとり、昨日にかはらず、夕方の御祝また同じ御朝道喜のもの、每朝川端道喜是を上ル、是を舌餅とよの 人けふは女中あひ  
に紅梅、うへはねり貫をきる是を雪の下といふ、四日、あしたのもの、同七日をのぞきて十四日